

「次の船は三日後だ」
台風で孤立した灯台で
潮焼けの灯台守に三日
三晩カントを暴かれる
地方紙記者

「っ……」

布団を頭から被って丸くなる。歯が鳴る。手が震える。子供の頃からずっとこうだ。二十七にもなって雷で震えるなんて、情けなくて、惨めで、誰にも見せたくない姿だった。

隣の部屋から足音がした。木の壁一枚隔てた向こう。

こん、こん。ノック。

「……大丈夫か」

低い声。一日に二十語も喋らない男の声。

返事ができない。唇が震えている。もう一度、雷が落ちた。近い。灯台のすぐそばだ。窓が白く弾けて、暗闇に戻る。

ドアが開いた。ランタンの灯りがゆらゆらと入ってくる。

鳴瀬岳人。灯台守の三代目。潮で焼けた赤銅色の肌。前腕が異様に太い。ランタンを床に置いて、布団の中で丸まっている俺の横に、何も言わず腰を下ろした。

「……子供の頃から、雷が……すみません、情けないですよ
ね」

鳴瀬は答えなかった。ただ大きな手で、布団越しに俺の頭を押さえた。犬をなだめるみたいに、ゆっくりと。

雷。至近。

身体が勝手に動いた。布団から飛び出して、鳴瀬にしがみつく。顔を胸に押し付ける。心臓の音が聞こえた。ゆっくりで、太くて、海の底みたいに静かだった。

潮の匂い。汗の匂い。獣じみた雄の体臭。

——力が、抜ける。

鳴瀬の手が背中を撫でていた。肩甲骨のあたりを、ゆっくりと。

——その手が、背骨を辿って腰に降りた。

「……っ」

びくり、と背筋が跳ねた。シャツの裾が捲れて、素肌に指が触れている。潮焼けした硬い指先。ざらりとした感触が腰の窪みを撫でた瞬間、下腹の奥がじん、と疼いた。

「あ……鳴瀬、さん……？」

「嫌なら言え」

低い声。でも手は止まらない。親指が腰骨の際をなぞっている。その指先から、知らない熱が腹の奥に広がっていく。ずっと無視してきた場所に、じわり、と血が集まっていく。

（やめてください、って言えよ）

言えない。喉が動かない。指が触れた場所から、身体が勝手に蕩けていく。

鳴瀬の手が俺を仰向けにした。ランタンの灯りだけ。天井の影が揺れている。借り物のシャツを、ゆっくりと捲り上げられる。白い腹が露わになった。

「色、白いな」

潮焼けした指が、俺の下腹をなぞる。臍の下。恥骨の上。

——さらに下へ。

ペニスの裏側。その奥にある、俺自身が二十七年間無視し続けてきた割れ目に、指先が触れた。

全身が硬直した。

「やっ……そこ、だめっ……」

「知ってた」

鳴瀬の灰色の目が、ランタンの灯りの中で俺を見下ろしている。

「船着場で荷物運んだとき、匂いがした」

心臓が止まった。

「……匂い？」

「甘い匂いだ。汗に混じってた。潮の中で生きてると、わかる」

（バレてた。最初から——カントだって、バレてた）

二十七年間、隠して、無視して、ないことにして生きてきた。この男は会った初日に嗅ぎ分けていた。

鳴瀬の指が割れ目をなぞった。

「ひ……っ♡」

声が出た。自分のものじゃない声。一度も触れたことがない場所なのに、指がなぞっただけで蜜が滲む。じわり、と熱い液体が指先を濡らしていく。

「濡れてる」

「ちがっ……違います、これは……っ」

（違う。わかってる。俺の身体が——男なのに——おまんこが、勝手に——）

鳴瀬の中指がカントの入り口に触れた。くちゅ、と小さな音。処女のそこが、ひくり、と痙攣する。

「っ……あ……♡」

指が第一関節まで入った。

「ひ、あっ……！♡」

聞いたことのない声が口から漏れた。甲高くて、甘くて、情けない声。中は灼けるように熱い。きつい。鳴瀬の太い指を、カントの壁がぎゅう、と締め付ける。

「痛いかな」

「っ……痛、い……けど……っ♡」

痛いだけじゃない。痛みの奥に、溶けるような甘い痺れがある。それが怖い。自分の身体が知らない反応をしている。男の身体なのに、奥が指を呑み込もうとしている。

鳴瀬が指を動かした。ゆっくりと、引いて、押し込む。

ぬちゃ……くちゅ……ぬる……

「やだ、やだ……っ♡音、聞かないで……っ♡♡」

「聞こえるか。お前の中の音」

嵐の轟音の中でも聞こえるほど、カントが鳴っている。自分の身体から出ている音だと認めたくない。認めたくないの

に、腰が勝手にびくびくと震えて、指を締め付けるたびに水音が大きくなる。

「ん……っ♡ や、だ……もう……っ♡♡」

指が二本になった。処女のカントが軋む。

「あ……っ♡ い、痛……っ♡」

「力、抜け」

鳴瀬の声。低くて短い。命令じゃない。海の男が、荒れた海で船を繋ぐときの声だ。焦らない。ただ確実にロープを引く。

（この人、怖い。全然急がないのが、怖い）

指がゆっくりと出し入れされる。痛みが薄れていく。代わりに、奥のほうに甘い疼きが溜まっていく。鳴瀬は無言で、ひたすら中を探っている。

指先が、前壁の膨らみに触れた。

「——あ、あっ♡♡ そこ、だめっ……なに、これ……っ♡♡」

腰がガクンと浮いた。視界が白く弾ける。灯台の光じゃない。頭の中で何かが爆ぜた。

鳴瀬はその場所を見つけた瞬間、逃がさなかった。指先が正確にそこを押す。こりこり、と。容赦なく。

「ひ♡ あ♡ あっ♡ やだ、やだっ……♡♡ そこ押されたら、おかしく……っ♡♡♡」

（おかしくなる。男なのに。カントで、指二本で、こんな——）

身体が痙攣している。足の指が丸まる。腹の奥で何かが膨れ上がって、もう押し留められない。

「あ♡ あ♡ あああっ♡♡♡ だめ、なんか、くる——っ♡♡」

声にならない声で喉が引き攣った。カントが鳴瀬の指をきゅうきゅうと締め付けて、どろり、と蜜が溢れた。初めての絶頂。処女のカントが痙攣しながら、知らない快樂に吞まれていく。

「……すごい量だな」

鳴瀬が指を引き抜いた。蜜の糸が指と俺のカントの間に引いて——ぷつり、と切れた。

「もう、やめ……っ」

涙目で、息を荒くして、仰向けのまま動けない。シャツは胸の上まで捲れて、下半身は晒されたまま。蜜が太腿を伝って、シーツに染みを作っている。

鳴瀬が立ち上がった。作業ズボンのボタンを外す音。布が落ちる音。

ランタンの灯りに照らされたそれを見て、呼吸が止まった。

太い。長い。漁師の血。前腕と同じで、この男の身体は全部が規格外だった。血管が浮いていて、先端がてらてらと光っている。

「入れるぞ」

「む、無理です……っ♡ そんなの、入らな……」

鳴瀬は聞いていなかった。俺の脚を持ち上げて、M字に開かせる。8秒ごとに灯台の光が回る。白い閃光が窓を通過して、開かれた俺のカントを照らした。

（見られてる。灯台の光に。全部）

蜜が垂れている。ぱっくりと開いた割れ目が、指で慣らされてひくひくと痙攣している。

先端が入り口に触れた。

「っ……♡♡」

熱い。硬い。指の比じゃない。

ずぶ、と頭が入った瞬間——

「っ——♡♡♡」

口が開いたまま固まった。声が出ない。裂かれている。中を押し広げられている。カントの壁がぎちぎちと軋んでいる。

「力、抜け」

「ぬ、抜いて……大きすぎ……っ♡」

鳴瀬は止まらない。ゆっくりと、しかし確実に腰を進める。

ずぶ……ずぶ……ずぶ……

処女のカントを押し広げながら、奥へ、奥へ。

「あ……っ♡ ああ……っ♡♡ おなか、裂ける……っ♡♡」

根元まで入った。鳴瀬の恥骨が俺の恥骨に押し当たっている。腹の奥に、硬い異物が居座っている。中が鳴瀬の形に変えられていく。

涙が零れた。痛みと、その奥にある得体の知れない充足感に、頭が混乱している。

（なんで。なんで、痛いのに——カントが、嬉しそうにしている……っ♡）

鳴瀬が動き始めた。最初はゆっくり。引いて、押し込む。

ずちゅ……ずちゅ……

「ん……んあ……っ♡ あ……あ……っ♡♡」

カントが慣れていく。痛みが引いて、代わりに奥を突かれるたびに甘い痺れが腹の底から湧き上がる。

鳴瀬のピストンが速くなった。寡黙な男が、息だけ荒くしている。無言。何も言わない。ただ腰を叩きつけている。

（この人……俺のカントで、気持ちよくなってる……♡）

それがわかった瞬間、カントがきゅう、と締まった。

「っ♡♡」

「……締めるな。まだ動けなくなる」

「し、締めてない……っ♡ 勝手に、なっ……あ♡♡」

（嘘。俺の身体は——男なのに——この人のものを受け入れて、悦んで——）

鳴瀬の手が腰を掴んだ。逃げられない。

ずちゅん♡じゅぷ♡ぐちゅ♡♡

奥を突き上げられるたびに、カントから卑猥な水音が溢れる。蜜が泡立って、結合部からぐちゃぐちゃに零れている。

「中はだめ……っ♡♡中には出さないで……っ！♡」

鳴瀬は答えなかった。腰を掴む手が強くなる。ぎし、とベッドが軋んだ。ピストンが深くなる。最奥に押し当てるように、ぐっ、と腰が押し込まれて――

「ひぎっ♡♡♡あ、おお……っ♡♡♡なか、熱い……っ♡♡」

どく、どく、と中で脈打っている。精液が注がれている。カントの奥が焼けるみたいに熱い。

(出された。中に。カントに――男の精液を――♡♡♡)

鳴瀬が引き抜いた。ずるり、と。

白濁が俺のカントから溢れ出す。とろり、と太腿を伝って、シーツに落ちる。

「う……っ」

丸くなった。泣きながら。膝を抱えて、震えている。身体の内奥がまだじんじんと疼いている。初めて使われたカントが、ひくひくと収縮を繰り返している。

(精液が出ていく。なのに、奥がまだ――もっと欲しがってる――)

鳴瀬は黙って、後ろから抱き込んできた。大きな身体が背中を覆う。腕が腹に回る。潮の匂い。汗の匂い。

（嫌だ。こんなの——この腕の中が、心地よいなんて——認めたくない——）

そのまま、意識が落ちた。



——硬いものが尻に押し当てられる感覚で、目が覚めた。

暗い。まだ夜だ。嵐は続いている。空気が冷えている。深夜だ。

背中に鳴瀬の胸板。腹に回された腕。

——そして腰の後ろに、熱くて硬いものが押し付けられている。

「……もう一回」

「え、待って、まだ中に——んんっ♡♡♡」

後ろからそのまま入れられた。精液がまだ残っているカントに、ずるり、とペニスが滑り込む。

ぐちゅ……じゅぷ……

精液と蜜が混ざる音。背中を鳴瀬の胸板に押し付けられたまま、腕に抱き締められて、逃げ場がない。

「や……っ♡ さっき出したばかりなのに……っ♡♡」

「足りない」